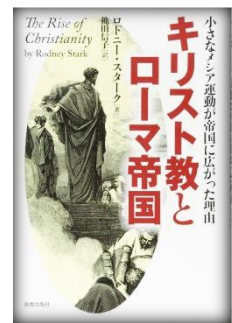


「愛のわざに励みつつ」(2020.4.19)

「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる。」(イザヤ 43:19)

現在、私たちの教団の教勢は『年鑑』に記されているが、年々厳しさが増している。私たちの教会も例外ではない。しかし、私たちには希望のみ言葉がある。上掲のみ言葉である！当教会に赴任して4年目を迎えたが、牧会者として立たされた時に与えられたみ言葉である。順風の時あるいは逆境の時、喜びであり希望であり、時としてチャレンジである。主がこの横手という荒れ野に道を敷く、と言われる。ならば、その道の石ころ一つでも拾おうではないか。砂漠に大河を流れさせる、と言われる。ならば、小さな溝一つでも掘ろうではないか。主の大きな計画のために小さな一歩をいつも心掛けたい。

先日、興味深い本を購入した。『キリスト教とローマ帝国』(ロドニー・スターク著：新教出版)である。非常勤講師をしている東北学院大学の理事長・松本宣郎先生が解説していることにも魅かれたからである。早速、第四章「疫病・ネットワーク・改宗」を読んだ。面白い考察があった。迫害下のローマ帝国で、165年、ひどい疫病(おそらく天然痘)が蔓延し、15年も続き、その間に帝国の人口の四分の一から三分の一が感染死し、皇帝自身も病死した。また、251年にも同じくらいの疫病(おそらくはしか)に帝国は襲われた。なんとこの260年の間に、当時0.4%のキリスト教徒が20%になったというのである。



これまでキリスト教徒の増加の理由は、「殉教者の血は教会の種である」(テルトゥリアヌス)という言葉に象徴されるように、どんな迫害にもめげず、忍耐の限りを尽くして信仰の従順を貫いたところにあった、と私は理解していた。ところが、別の視点が開かれた。それは、彼らがこの疫病の苦難をみ言葉の実践の機会としたことである。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイ 7:12)。この黄金律を心に響かせ、愛のわざに励みつつ、迫害下のローマ帝国を生きた、その生きざまである。著者は社会学的分析を通してこう結論付けるのである。

いにしえの信仰の先達に思いを馳せ、この横手の宣教を、その小さな一歩をどう進めるか。本日(4/19)の総会において分かち合いたい。